原 著

日常生活における子どもの人形を用いた象徴遊びにみる 認知発達とボキャブラリー・スパートに関する研究

小山 正

要 約 : 象徴機能の発達により, 1歳を過ぎた頃には象徴遊びや言語がめざましく発達し, 1歳台後半にボキャブラリースパート (Vocabulary spurt : 以下 VS とする) がみられる。VS には子どもの認知発達が大きく反映されている。本研究では, 1語発話期における子どもの認知発達 (特に他者認識の発達) と VS との関連性を明らかにするため, ひとりの健常児を対象として, 子どもの日常生活における人形を用いた象徴遊びと言語発達を縦断的に観察した。

その結果, 日常生活場面における人形を用いた象徴遊びには, 子どもの日常経験が遊びのテーマとして次第に取り入れられていった。そこには子どもの他者認識の発達が反映され, それとともに表出語彙の獲得に進展がみられた。VS は, 象徴遊びに他者のふりがみられ始めた後に起こった。VS がみられて, 人形を用いた象徴遊びでは, 現実経験の再現遊びが出現し, 遊びのなかでことばによる表示もみられ始め, 自立語2語による2語発話 that appeared. In symbolic play with dolls, the child's daily experiences were reflected as themes, and the development of other recognition was reflected. As the child's other recognition developed, the development of expressive vocabulary also progressed. VS occurred after the child began to use other recognition in symbolic play. In symbolic play with dolls, the child's daily experiences were reflected as themes, and the development of other recognition was reflected. As the child's other recognition developed, the development of expressive vocabulary also progressed. VS occurred after the child began to use other recognition in symbolic play. In symbolic play with dolls, the child's daily experiences were reflected as themes, and the development of other recognition was reflected. As the child's other recognition developed, the development of expressive vocabulary also progressed. VS occurred after the child began to use other recognition in symbolic play.

本研究の結果から, (1) 1語発話期における日常的経験の広がり, 家庭での人形を用いた象徴遊び, 表出語彙の発達に影響していること, (2) 1語発話期にみられる VS には, 他者のふりを行うことにみられる他者認識や表象化能力の発達がかわっていること, の2点が明らかとなった。

索引用語 : 人形を用いた象徴遊び, 表出言語, 他者認識, 1語発話期, ボキャブラリースパート

Cognitive Development Reflected in Symbolic Play with Dolls and Vocabulary Spurt

Tadashi Koyama

Abstract : A child with non-handicap was observed longitudinally on a daily basis at home from the viewpoint of development of symbolic play with dolls and development of expressive language. We recorded her daily activities and experiences. We speculated the enrichment of her daily activities would be reflected in her symbolic play with dolls and her expressive language, especially the acquisition of vocabulary.

The results show the child began to adopt events in her daily activities as topics for her symbolic play with dolls. In doing so, she came to recognize the existence of humanity and developed understanding of other persons. Her expressive language developed in parallel with this symbolic play and understanding of others. In particular, a vocabulary spurt in one-word utterances occurred after the emergence of pretense activity of parents in her symbolic play. Next, her symbolic play became play reproducing her past experiences and injecting her daily experiences into her symbolic play with dolls. She used object substitution and miming to elaborate her play. She also began to express subjects from her daily experiences in her speech and two-word utterances emerged. Her symbolic play transferred into pretense of her mother's nursing behavior toward her. She used object substitution, miming and speech in conducting such symbolic play. It appears that in those acts she may begin to acquire metalinguistic capacity.

These results show that expanding the daily experiences of toddlers enriches the content of their symbolic play, which in turn enriches development of their expressive vocabulary. Especially, the development of understanding of others, reflected in games acting out other persons, correlates to a vocabulary spurt in one-word utterances.

Key words : symbolic play with dolls, expressive language, understanding other persons, one-word utterances, vocabulary spurt

本研究の目的

1 語発話期には, Vocabulary Spurt (以下, VS とする) といわれる語彙の急増期がある (Word Spurt と呼ばれることもある). この現象が注目され始めたのは決して新しいことではなく, 古くは, Stern(1907)¹⁾に遡る. 1980 年代に入り, VS は, 子どもの認知発達との関連で問題にされるようになる. たとえば, McShane (1980)²⁾は, 子どもの認知的な洞察 (insight), すなわち「物に名前があることの発見」(naming insight) によってこのような現象が起こると考えた. Sullivan 女史が, 井戸小屋に Hellen Keller を連れて行き, 水の出口の下で Hellen にコップを持たせ, 水を汲み上げ冷たい水がほとばしったとき, “water” と Hellen の手に綴った. Helen は, そのときすべての物に名前があることに気づき, それから物の名前を急速に覚えていった. この Hellen Keller の有名なエピソードからも VS の認知的前提として, 物に名前があることに子どもが気づくことがあることがわかる. その後, VS については 1 語発話期のひとつの発達の現象としてさまざまな研究者が注目している^{3,4)}. 近年では, Bloom (1993)⁵⁾が, VS について多面的に検討し, 物をを用いた子どもの自発的な遊びの観察結果から, 初語期と VS 期とは, 認知発達に質的な違いがみられることを指摘している.

認知の発達といった観点からみれば, 1 語発話期には, 子どもの生活において, 言語表現の主題となる諸

経験が拡大し, 外界認知が発達し, 人を含めた対象や, 出来事についての知識が広がり, 概括化されていく. このような認知発達と VS は深く関連していると考えられる. 清水(1980)⁶⁾は, 「同一ではないが, 共通するところを抽象し, 何らかの意味で等価な刺激には, 同一の反応を適用することによって世界を構成しなおす作用」を「概括化機能」と呼んでいる. また, 清水は, 新しいことばの獲得や急速な語彙の増加は, 対連合学習的に覚えていくのではなく, 子どもの主体的な認識活動のなかで, 概括化機能の発達によってみられるものであるとも述べている. VS が起こる時期は, 子どもが, 「ナーニ?」といって, 物の名称を大人に聞く質問行動が増える. これは, 子どもの知的好奇心の現れである. このような知的好奇心の発達や概括化の発達には, <他者認識>の発達がかかわっているのではないかと筆者は考える.

言語獲得期は, 子どもが身近な親を中心とした他者の行為を理解し, 人間的な行為の理解を進めていく時期である. 人間的な行動様式 (humanity) を学習していく過程でことばにもふれていく. 廣松 (1989)⁷⁾は, 他者理解について, いわゆる意識主体として認知するのが <他我認知>であり, 他者の表現を理解するのが <他者認識>であるとして, 他我認知と他者認識とを区別している. 言語獲得期にある子どもでは, 人間的な行為を理解していく過程で, 他者のつくりがわかってきたり (すなわち他我認知), そこから他者の表現の理解も進んでくる (本稿では, 以下において他我認知と

いう側面も含めて他者認識ということばを用いるが、そこには他我が認識されていくということが前提にある)。

一方、1語発話期における日常的経験の概括化は、言語以外の子どもの動作的なシンボル活動にも析出される。特にそれは、ままごと遊びなどの象徴遊びのなかでとらえられる。象徴遊びは、象徴機能の発達のひとつの現れであり、言語もまた象徴機能の発達を基礎に発達するということから、子どもの初期の象徴遊びと言語発達との関係は発達研究において注目されてきた (McCune-Nicolich, 1981⁸⁾、Wolf, 1982⁹⁾、小椋, 1988¹⁰⁾、小山, 1989¹¹⁾)。たとえば、小椋は、健常児4名を対象とした縦断的観察結果から、ある物を別の物にみたてて遊ぶの出現と語彙の増加、指示語、成人語の出現が対応することを指摘し、その背景には、言語と認知の両面における能記と所記との恣意的な関係の成立があると述べている。

先述したように、言語獲得期には、日常生活のなかで、人間的な行為の学習が急速になされ、その過程で他者認識が進む。この時期の他者認識の発達と象徴機能や表象化能力の発達は密接に関係し、その結果として、象徴遊びやことばの発達に変化がみられてくると考えられる。小椋も格助詞の使用には自己と他者意識が成立していないと困難であるとして、言語発達と他者理解の発達との関連性を指摘している。

一方、研究的には、この時期の子どもの他者理解、他者認識の発達をいかにとらえるかが問題となる。

その点について筆者は、子どもの人形を用いた象徴遊びからその発達の一面をとらえることができるのではないかと考えてきた¹²⁾。子どもの初期の人形を用いた象徴遊びについては、Wolf (1982)⁹⁾の研究がある。Wolf は、人形を用いた象徴遊びから子どもの他者理解の水準に着目し、1. 他者を道具的手段として扱う、2. 他者は自己と等しく人間的な行為を行うものとして理解し始める、3. 他者を独立した行為者 (agents) として認識し始める、といった3つの段階を提示している。また Wolf は、これらの他者理解の水準と言語発達との対応関係を指摘し、1語発話期は段階2に相当し、自己と他者の理解の発達が語彙の増加と関連があるとした。Wolf の研究からも、VS と他者認識の発達との関連が考えられる。

以上のようなことから本研究では、日常生活における人を通しての経験の広がりについて注目し、言語獲得期にあるひとりの健常児の日常生活場面における縦断的観察を通して、日常生活における経験が広がる過程で、それが日常生活での子どもの人形を用いた象徴遊びの

発達にいかん反映されていくのかについてまず検討した。そしてそのような人形を用いた象徴遊びの発達にみられる子どもの認知発達や他者認識の発達と並行して獲得される発話の内容を詳細にみていくなかで VS との関連性について検討を加えた。

研究方法

1. 対象児

A 児、第1子。女兒。妊娠中、特に異常なし。10ヵ月満期出産。帝王切開で出産。出生体重 2590 g。定額3ヵ月。座位9ヵ月。這い這い9ヵ月。独歩11ヵ月。初語11ヵ月であった。既往歴は特になく、健康。発達検査の結果は、1歳0ヵ月時と1歳11ヵ月時に実施した新版K式発達検査の全領域DQはそれぞれ110, 104であり、標準的に発達している子どもである。

A 児の家族は、両親とA 児の3人家族であり、父親は公務員、母親は専業主婦である。日常は母親とともに過ごしている。

2. 方法

A 児が生後2ヵ月から、毎日、朝食後1時間と夕食後2時間の筆者との自由遊びを観察した。遊びには、一定の事物、玩具を用意した。人形については、生後2ヵ月から提示し、キャラクター性の高いものとそうでないものを使用し、それぞれぬいぐるみとビニル性のものを用いた (表1)。

観察の記録は、観察終了後筆記録し、子どもに気づかれないようにカメラを用意しておき、遊びに変化がみられた場面で撮影した。

また、A 児の日常的経験についても父親と母親が協力して日誌的に記録した。

3. 言語発達の観察方法

A 児の獲得していく新しい語、発話について注目し、毎日、父親、あるいは母親ができるだけA 児と接する時間を取り、その日にみられた新出語と、それらの語が表示する内容をできるだけ漏れなく把握し、筆記録した。また発話についても同様に記録した。

4. 分析の方法

象徴遊びについては、A 児に最初のふりがみられ始めてから、人形に対するふり遊びに注目し、観察記録のなかから関連のエピソードを取り上げ分析した。

言語発達については、日常生活経験の広がりとともにどのようなことばが獲得されていくかといった観点から表出語彙の内容を分析し、文法的 (シンタックス) 発達についても分析した。VS については、Bloom (1993)⁵⁾を参考に、20語の異なり語を獲得した後、1週間に新しい語を3語ずつ、あるいは、1ヵ月間に12の

表1 本研究で用いた玩具

ままごとセット(カップ, スプーン, 皿, フォーク, レンジ, フライパン, 鍋, ミニフード, 包丁, ヤカン, ミニカップ, ミニスプーン)
人形セット (家, プランコ, スベリ台, テーブル, イス, 車)
人形*(キティちゃん, ミド, ファド, レッシー, ソラオ, ノンタン, プタ, アンパンマン, ドラエモン, ピーター・ラビット, ルーシー)
ぬいぐるみ (犬, 猫, 象)
積木セット
ブロック
箱 (ダンボール)
絵本

*ここにあげている人形についてはミニチュア(ビニール性)と布性のぬいぐるみを用意した。

新しい語が獲得された時期にVSが起こっていると考えた。

観察結果の分析, 分類にあたっては, 障害児保育経験者と筆者の2名で行い, その一致率は0.97であった。なお, 一致しないものについては協議の上決定した。

結 果

1. 日常生活場面における人形を用いた象徴遊びの発達過程

1歳から2歳過ぎまでにみられたA児の人形を用いた象徴遊びは, 人形を自己の行為の受け手とする<受動的他者>, 人形自らが行為を行っているように扱う<能動的他者>, <現実とごっこの混同>, <みたて>の発達, <他者のふり>, <現実経験の再現遊び>, <みたて・マイムによる表現>, <母親の養育行動のふり>, <人形と人形との関係づけ>, <みたて・マイムの広がり>, <みたてでいることを言語で表明>, <みたて・母親のふりの組み合わせ>, <人形の内的状態を言語で表現>といった行為に分類された。それぞれの行為について, 1歳6ヵ月から2歳過ぎまでの観察エピソードをまとめたものが表2である。

人形を用いた遊びは, 人形を子どもの行為の受け手として扱う<受動的他者>が, A児の場合, 1歳0ヵ月にみられ始めた。そして, 人形自らが行為をしているように扱う<能動的他者>は, 1歳3ヵ月に出現した。人形を用いた遊びにおいて, 子どもの行為の受け手として扱うことと, 人形を行為主(agents)として扱うことの切り替えは比較的早くから捉えられていた。1歳3ヵ月から1歳6ヵ月にかけて, 人形へのふり遊びは, 能動的他者, 受動的他者のどちらの場合にも, 食べること, 寝ること, 歩くことにかかわるもので, すでに子どもが自己に向けて行っていたふり行為

であった。

そして, 現実とごっこを子どもが混同しているのではないかと思われる行為が観察された。1歳6ヵ月2日から, A児が食べているものを人形に食べさせてみせる行為が頻繁にみられた(図1)。人形に向けたものではないので, 表2にはあげていないが, 次のような行為も遊びのなかで観察されている。

A児は牛乳が好きで, 冷蔵庫に牛乳が入っていることは, この時期にはすでに知っていた。また, 飲み残したものを冷蔵庫に入れておくといったことも母親からいわれていた。1歳6ヵ月12日の観察では, 遊びのなかで, ままごとのカップを取り, 本当の冷蔵庫に入れて冷やすといったことがみられた。また, 同日, A児が入浴するときにノンタンの人形を連れて一緒にお風呂に入り, 石鹸をつけて洗うといったことも観察された。

現実とごっこの混同といえる行為をしながら, 子どもが他者から受けている行為を人形に向ける行為のレパートリーも広がった。図2にみられるように, 真剣な表情でぬいぐるみに自分の食べているおやつと同一の物を食べさせようとする。子どもが経験していることのなかで印象に残っているものが遊びのなかで試されていく。

1歳7ヵ月になると, ある物を別の物にみたてるといった<みたて>が出現した。みたてが観察され始めて, 同じ1歳7ヵ月には, ミニカップなどの小事物によるふりも出現し, A児の遊びがシンボリックになってきた(図3)。みたてのような象徴機能の発達がみられても, 現実とごっこの混同は観察され(図4), 人形を用いた象徴遊びのなかにみたてはまだ含まれてこない。

1歳8ヵ月には, 他者の行為のふりがみられ始め(図

表2 初期の人形を用いた象徴遊びの発達過程 (A児・女兒)

CA	能動的他者	受動的他者 現実とごっこの混同
1:06.02*	◆人形を集団にして順に電話をかけさせたり、食べさせる	◆朝食のときに食卓の上に人形を置いてA児が食べているものを食べさせる
11	◆コンパクトの鏡をミド (人形) にみせる	
12	◆イナイイナイバーを人形にさせる	◆入浴時にノンタンをつれて入って、タオルにセッケンをつけて洗う
15		◆夜寝る前にミド (人形) を横に置いて本を読むふり
26		◆A児のおやつをミド (人形) に食べさせる
1:07.09		◆父親が玩具のマイクをA児に向け「おなまえは」というと発声し、父親が「こやまあずさちゃんです」というと喜び、複数の人形にマイクを向ける
10	みたて能力 ◆K式検査のカップと赤鉛筆で食べるふりをする	◆A児のおやつをアンパンマンの人形に食べさせる
17	◆ミニフードで食べるふりをする	◆A児のおやつをアンパンマンの人形に食べさせる
	◆ミニカップで飲むふりをする	◆人形用にブロックで作った家にA児が入ろうとする
1:08.08	他者のふり ◆父親の仕事のふりをする	
10	みたてと人形の組み合わせ	
22	◆ブロックの家に人形を寝かす	
25	◆玩具のピアノで弾くふりをする	◆人形の椅子に人形を座らせて向かいにA児が座り、食事を一緒にするふりをする
1:09.02		現実経験の再現遊び
		◆玩具の車にミド、ファドの人形を乗せて「ブアップー」といって押して走らせる
1:10.05		◆玩具のブランコにミド、ファドの人形を乗せる
14		◆夕食にえびを食べたことをままごとのレンジの上になべを置いて「エビ、エビ」という
15		◆積木の陰に人形を隠しかくれんぼをさせる
		◆積木で仏壇を作り拜む
		◆積木をアイスクリームにみたてて「アーオイシイ」という
24	◆ままごとのフライパンとレンジで調理するふりをし、ミニフードを入れ、A児の服を指さし、父親の方を見るので、「エプロン？」と父親がいうと「ウン」というのでティッシュをエプロンにみたててつけてやると、A児は「ママ」という (母親の行為のふり)	
26	◆人形と人形を仲良くさせてごはんを食べているふりさせる (A児は人形の背後に位置する)	
29	みたて・マイムによる表現	母親の養育行動のふり
1:11.01	◆マイムによってアイスクリームをすくうふりをして積木につける (積木をアイスクリームのコーンにみたてている)	◆人形にテレビをみせる
04	人形と人形との関係づけ	◆人形に「ミーチャン、〇〇ヨ」といって話しかける
08	◆人形に犬の人形を「オンプ」といってのせる	◆部屋の中で傘をさして人形を抱いて「アメ、アメ」といって歩き回る
09	みたて・マイムの広がり	◆買い物に行くふりをする。本を買うふりをして「テープ」という (お金を払った印としてテープをして欲しいの意)
14	◆母親のヘアバンドを聴診器にみたてる	◆「チャイチャイ」というので積木で風呂を作ると人形と一緒に入り、頭を洗うふりをする
2:00.02	◆頭にハンカチをのせてお風呂に入るふりをする	
	◆入浴して母親に洗ってもらう様子をマイムで表現	
05	◆積木を電話の受話器にみたててA児の耳にあて「パ、パ、ハイ」と話す	◆人形と一緒におやつを食べるが、以前のように人形の口元に直接持っていけない
		◆座布団を敷いて人形を寝かせ、母親がいつもA児を寝かしつけているふりをする
		みたてと母親のふりの組み合わせ
		◆母親がA児を寝かしつけているときに電話がかかってきて積木を電話にみたてて話すふりをする
19	みたてていることを言語で表明	
	◆紙の箱を「チューチュー」といって牛乳のパックにみたてて微笑む	◆牛乳パックの椅子や座布団で家とベットを作り、人形を寝かせて本を読ませるふりをする
	人形の内的状態を言語で表明	
	◆ミニカーにアンパンマンの人形を乗せようとして、アンパンマンが倒れ、「アンパンマン、イタイヨー」という	

*1歳6ヵ月2日を示す

図1 現実とごっこの混同(A児, 1歳6ヵ月7日).
自分の食べている朝食を人形に食べさせようとする

図2 現実とごっこの混同(A児, 1歳6ヵ月12日).
真剣な表情をして人形に自分のおやつを食べさせる

図3 小事物でのふり(A児, 1歳7ヵ月17日).
ミニカップで飲むふりをする

図4 みたてが観察させた後にみられた現実とごっこの混同(A児, 1歳7ヵ月10日).
人形にブロックで作ってやった家にA児も入ろうとして入れなくて怒る

5), 小事物を用いて他者の行為のふりをすることも出現した。さらに, 1歳8ヵ月10日には, 人形を用いた象徴遊びにみたてが含まれるようになった。

1歳9ヵ月になると, <現実経験の再現遊び>がみられ始めた, 午前中に買物に車で出かけると, その日の夕方に人形を使って, その様子を再現するなどといったように, きわめて日常的な経験が遊びに取り入れられていく。1歳10ヵ月には, 実家に帰って, 仏壇を拝んだことを積木で再現するなど(図6), 遊びに取り入れられるトピックが時間的, 空間的に広がり始めた。また, 他者の行為のふりも再現的になるとともに, 玩具のフライパンとレンジで調理するふりをして, そこにミニフードを入れるなど, 行為が順序立てられて系列的になる。このような遊びは, その後, A児自身が母親のふりをして, 人形たちに対して養育的な(食べさせる, 寝かせる, テレビをみせるなど)行為を行うこと(<母親の養育行動のふり>)へと変化した。

このようなく母親の養育行動のふり>には, 言語による表示もみられてくる。1歳10ヵ月16日には, A児が, 母親が食事を作っているふりを行っている際に, 自分は「ママ」であるといったように, ことばによる表現がみられた。1歳10ヵ月後半には, 何も物を使わずに, 自分の手だけによってあたかもそれがあるかのように示す<マイム>による表現も出現した。1歳11ヵ月に入ると, みたても広がり, マイムやみたてによって経験の再現が精緻化されていく。この間には, 自分が父親との遊びで日常的によく行っているかくれんぼを2体の人形を用いて, 探す者と隠れる者との関係を表すような遊びがみられるようになった。

一方, この時期は, 風邪を引き, 病院に行ったり, 父親と二人で買物に行き, 自分の物を買ってもらい, 代金を払った印としてお店の人にテープをつけてもら

図5 他者のふり (A児, 1歳8ヵ月8日).
父親の机に上がり, 父親が仕事をしているふりをする

図6 現実経験の再現 (A児, 1歳10ヵ月15日).
実家の法事に行って仏壇を拝み, 帰ってきてからその再現をする

ったり, 自分の傘を買ってもらうなど, A児の日常的な経験が日々広がった時期である。それらの新たな経験が, 再現遊びとして人形を用いた象徴遊びのなかで表現された。

2歳0ヵ月に入ると, 母親の養育行動のふりも, 母親の話しかけ方を真似て人形に語りかけたり, 寝かしつけるふりをするなど, 母親の役割を人形に対して取っていることが, 明確にみて取れるようになった。母親の養育行動のふりのなかで, 積木を電話にみせて, 「モシモシ」と話すなど, みたてていることをことばで表現することが観察され始めた。

このような人形を用いた象徴遊びのなかでの言語表現は, 人形の内的状態を表現することへと次第に変化した。人形が倒れたときに, 「イタイ」というような表現は子どもによってはもっと月齢の低い段階でみられる場合もある。しかし, A児の場合は, これまで述べ

てきたように, まず自らが人形に行為することによって, 経験者として人形を捉えていき, 人形が感じていることをことばによって表現することは少し時間をおいて現れた。

2. 人形を用いた象徴遊びと言語発達との関連

本研究で対象としたA児においては, 初語は, 0歳11ヵ月6日に「マンマ」(食物の要求時)がみられた。その後の言語発達の様相を表3に示す(表3には獲得されたことばの内容をすべて示した)。この表によって, A児の日常生活経験の広がりがことばの獲得の内容に影響を与えていることがみて取れる。A児の場合, 初語出現から6ヵ月間の新しい語の獲得は緩慢である。しかし, 比較的初期から物の名称の獲得が早く, Nelson (1973)¹³⁾の初期の語獲得のスタイルでは指示型(referential style)に相当する。

ここでは, 結果1で述べた人形を用いた象徴遊びとともにみられたA児の表出言語の発達について述べる。人形を用いた象徴遊びにおいて, 受動的他者から能動的他者としての扱いへと変化した1歳2ヵ月から1歳6ヵ月に, 言語発達においては身近な人物の名称が獲得された。また, 人形を能動的他者として扱う遊びが進んでくると, 「キティ」といったようなキャラクターの名称を使用することがみられ始めた。

人形を用いた象徴遊びにおいて, 現実とごっここの混同が頻繁にみられた1歳6ヵ月には, 「マンマ」から「プリン」, 「ギューニュー」など, 未分化であった食べ物の名称において, それぞれの事物を指す語の獲得がみられた。すなわち語の分化である(Wernerら¹⁴⁾は, この現象を<語の分化と特殊化>の過程と呼んでいる)。また, レンジや電話などの対象に対象規定的に語音を対合していき, その物にかかわる日常的経験の増加とともに身近な物に対する名称を獲得し, 語を分化させていった。

1歳7ヵ月に入って象徴遊びにおいて, みたてが出現した直後に, 指示語が出現した。それにつづいて約1ヵ月後の1歳8ヵ月に他者のふりが出現し, VSがみられ始めた。VSとともに人形を用いた象徴遊びにみたてが含まれるようになった。A児の場合, VSは, これまでから日常的にA児が慣れ親しんできた物の名称の増加による。また, VSが起こっている時期に終助詞「よ」の出現がみられた。

VSが起こり, 1歳9ヵ月に, 人形を用いた象徴遊びでは, 現実経験の再現遊びがみられた。現実経験の再現遊びが出現した後, 1歳10ヵ月12日に自立語2語による2語発話が出現した。A児の最初の2語発話は, 「プーブ ママ」(ママは自動車学校に行ったの意)で

表 3 A 児の日常生活における人形を用いた象徴遊びと言語発達との関係

日常生活における人形遊びを用いた象徴遊びの発達	日常生活における表出言語の発達							文法的発達の様相
	生活年齢	特定名詞	一般名詞	動作語	修飾語	個人・社会語	機能語	
受動的他者の出現	1：00.06		マンマ					1
	1：01.11		ニヤー			ハイ		2
	1：01.17							3
	1：02.06	ママ		アッタ				4
能動的他者の出現	1：02.07		テッチテッチ					5
	1：02.16				イタタタ			6
	1：02.17		ジャージャー ワンワン					7
	1：03.04							8
現実とごっここの混同	1：03.17	パパ						9
	1：04.09	パンマン						10
	1：04.16	バーチャン						11
	1：05.16	ジー						12
(みたての出現)*	1：05.21		プリ(プリン)					13
	1：06.01		ギューニユー ジー	ボーン, ジャー イタ				14
	1：06.02							15
	1：06.08	キティ	ブーン, チン (レンジ) モナモナ(電 話)			オー		16
(他者のふり)*	1：06.12							17
	1：06.20							18
	1：07.02	ネータン						19
	1：07.11		ジュ(ジュー ス)		イヤン			20
	1：07.16				アッチ(場所) アイタ ブーンブーン			21
	1：07.17							22
	1：07.21							23
	1：08.00			アッコ(だっ こ)				24
	1：08.03	(アーバンマ ン)	パン					25
	1：08.08							26
	1：08.09		ボキャブラリー・スパート (VS)					27
			ブーブ, アン チ(ウンチ), ポーボ, プー					28
								29
								30
								31
								32
								33
								34
								35
								36

表 3 つづき

日常生活における人形遊びを用いた象徴遊びの発達	日常生活における表出言語の発達							文法的発達の様相
	生活年齢	表出語彙の獲得の様相					累積語数	
		特定名詞	一般名詞	動作語	修飾語	個人・社会語		
みたと人形の組み合わせ 								

表3 つづき

日常生活における人形遊びを用いた象徴遊びの発達	生活年齢	日常生活における表出言語の発達							文法的発達の様相
		特定名詞	一般名詞	動作語	修飾語	個人・社会語	機能語	累積語数	
日常生活における人形遊びを用いた象徴遊びの発達	1:10.11		グ(グリ), チャ(かぼちゃ), ワッシヨイ(歌名)		オイシ			82	自立語2語の結合
	1:10.12								
	1:10.15		バン(バナナ)シン(写真)	オンブ				85	
	1:10.16							86	
	1:10.18		アツチ				ヤ	88	
	1:10.23		ガーガー				ヨ	90	終助詞「や」(誘い, 命令) 終助詞「よ」(誘い), 自立語2語と語の反復の組み合わせ
	1:10.25		イス, ヒュー					92	
	1:10.26	アーチャン(自分の名前)	スーブ, チーズ		モット	ピンボーン, バイビー		99	格助詞「の」(所属)
	1:10.28							100	
	1:10.29		パンフ(パンツ)					102	
人形と人形との関係づけ	1:11.01		ドン(うどん)	ジャンプ, ゴホンゴホン(せき)				105	
	1:11.04		カレー, ポンボン(聴診器)					107	
	1:11.05		チャブチャブ, ピンク					109	
	1:11.06		チョウチョ, オッパイ		ウレシイ			112	
	1:11.09		コップ, [ネコ]	スタート, ゲーグ(吐くこと)				115	
みため・マイムの広がり	1:11.11		クスリ, シェンシェ					117	イヤモン ホシイ イイヨ, イイ
	1:11.13	フアーフアー, ビッコロ						119	
	1:11.14							120	
	1:11.15							123	

表 3 つづき

日常生活における人 形遊びを用いた象徴 遊びの発達	日常生活における表出言語の発達							
	生活年齢	特定名詞	一般名詞	動作語	修飾語	個人・社会語	機能語	累積語数
日常生活における人 形遊びを用いた象徴 遊びの発達	1:11.16		テンキ, ヒゲ		オワッタ	イイノ*		124
	1:11.19		チヨキ, チョ					126
	1:11.20	ムック	キ, テーブ					129
	1:11.21	レッシー	リンリン(三 輪車)			カシテ		132
	1:11.27		ミミ, ピック (ボケット)	タツチ		ウン, イイエ イイエ		137
	1:11.28	ミツキー	[レンジ], ボ- [火]	バック	チツチャイ チヨット			139
	1:11.29		チューチャー ゴ-, コンコ ン, アリブブ, ホワワ, ベー, ホワンホワン (以上, 本名)					142
	2:00.00	ジャジャ(ジ ヤジャマル)						150
	2:00.03		ドオードー (歌名)	イク, キテ		ミテ, ヤッタ ー		156
	2:00.05	ユウタ	オウチ			アート(あり がとう)		159
みたてと母親のふり の組み合わせ みたてでていることを 言語で表明	2:00.06	ドン(ドラエ モン)						162
	2:00.07		[リング], フ タツ, クツシ タ, ハ(歯)					
	2:00.11	ヤダモン	ドーナツチュ, ミンナゼリー		イッバイ	ヨ-イ		168
	2:00.12	ススーヒー	チヨツチヨツ (歌名), キッ プ, バギー アサ, コーヒ ー					169
	2:00.13							172
	2:00.14							174

副助詞「は」(主語), 格助
詞「が」(主語), 終助詞「の」
(断定)終助詞「よ」(言い張る気持
ち)

表3 つづき

日常生活における人形遊びを用いた象徴遊びの発達	日常生活における表出言語の発達									
	生活年齢	特定名詞	一般名詞	動作語	修飾語	個人・社会語	機能語	累積語数	文法的発達の様相	
人形の内的状態を言葉で表現	2:00.15		ウミ					176	副助詞「も」(主語)	
	2:00.16	ピーター, シンチャン, ヤンボー			ゼンブ	サンシヤイ		182		
	2:00.18	バイキン, ゴーチャン	クーコウ, ケーキ, ボク	オッキ	マダ			189		
	2:00.19	バンビ		シュバツゾー				191		
	2:00.20	アピン, サンタ, キチャン	ギンコウ, クモリ, ツキ		キレイキレイ	アンパンチ		199		
	2:00.22	[スヌーピー]	アシタ, ダイ(ダイフキ)					201		
	2:00.23		ジンジャ, シ		ダイジ	ハイ		202		
	2:00.24		オート(仕事), タンポポ, ビール, シューシユ, アカチャン					209		
	2:00.26		アイウエオ, フーセン		シタ					
	2:00.27		ヒモ, ジャンパー							
	2:00.28		ソージ, ペット					216		
	2:00.29				ハイッテル, サツ, ハンタイ			220	自立語3語の結合	
	2:01.00	タッチャン, トーサン	カゴ, シューテン, パジャマ, キイロ		ネムイヨ	エートオ		228		

注1. [] 内はすでに出現している語の成人語化を示し、累積語数には含めていない

2. () 内はその語の表示内容の説明である

3. *印の語は、すでに出現している語と語の語連鎖であり、累積語数には含めていない

4. ()*で示したみえて、他者のふりといった象徴遊びは人形を用いたものではない

あった。さらに現実経験の再現遊びが出現して、経験の広がりや語の広がり結びつくようになった。また、母親の養育行動のふりがみられ始めた後に「アーチャン」というA児の呼び名がいえるようになった。

人形を用いた象徴遊びにおいて、みたて、マイムによる表現が盛んになる1歳10ヵ月中頃には、物の名称の獲得がいっそう進んだ。この時期の物の名称の内容をみると、食べ物や身の周りにある物の名称の広がりに加え、散歩に出て、風の音や病院に行ったことなど、日常の経験のなかでA児の印象に残ったことに関する語が即座に獲得されていった。

1歳10ヵ月の終わりには、言語発達では、所有を表す「の」の出現がみられ、人形を用いた象徴遊びにおいて、人形と人形を関連づけるような遊びが1歳11ヵ月に入って観察され始めた。

つぎに、人形を用いた象徴遊びで、現実経験の再現遊びにおいてみたてやマイムが組み合わされてきた1歳11ヵ月頃の言語発達をみると、人形の名称の増加と個人・社会語群で語の増加がわずかにみられた。その内容をみると、「ウン」「イイヨ」など、主に養育者との対話のなかであいづちや応答として使われるものである。また、この時期の言語発達における特徴は、身近な大人と対話の関係が持てるようになったということと、そのような関係のなかでの〈会話〉の発達があげられる。そしてこの時期の会話には、主語や断定を表す助詞の出現がみられている。

1歳11ヵ月半ばから、人形を用いた象徴遊びでは、みたて、マイムの広がりやみられ、言語発達においては、A児の日常生活での経験の広がりや物の名称の獲得に現れた。たとえば、三輪車で遊ぶことが多くなったことや、はさみやセロテープを使うようになったことが、「リンリン（三輪車）」、「テープ」などの語彙の獲得にも現れている。この頃は絵本に非常に興味が高くなってきた時期でもあり、語彙の内容では本の書名が1歳11ヵ月後半から増えた。絵本への興味の広がりや表象化能力の現れである。その発達に支えられ、日常生活経験の広がりや即座に物の名称の獲得に反映されていく。

2歳0ヵ月に入り、人形を用いた象徴遊びは、A児に対して母親が日頃行っている行為を再現することがさらに多くなり、その行為の対象として人形が用いられた。終助詞「よ」の出現もそのような遊びのなかで観察された。また、母親の養育行動のふり遊びに、母親の役割を明確に取っていることや、みたてが組み込まれるようになって、人形の内的状態をことばで表現することがみられ始めた。この時期には実際に親しく

している子どもの名前がいえるようになり、「自分も」といった他者に対して自己を強調する表現もみられ始め、言語発達に新たな進展がみられた。

考 察

1. 日常生活における人形を用いた象徴遊びにみられる他者認識の発達とVS

本研究で対象としたA児の日常生活における人形を用いた象徴遊びと表出言語の発達との関連をみた結果では、日常生活経験の拡大が、人形を用いた象徴遊びに反映され、シンボリックな世界が構築されていくきっかけになっていることがわかる。また、人形を用いた象徴遊びの発達からみた他者認識や象徴化能力の発達と、表出語彙の獲得との関連性が示唆された。

日常生活における人形を用いた象徴遊びの発達過程をみると、まず、日常的経験が遊びのテーマになっていくこと、そこにすでに述べたように他者の行為についての認識が絡んでいることがわかった。日常的経験のなかで印象に残ったことを、象徴遊びで主体的に試しながら、子どもは出来事やそれにかかわる人についての認識を深化させていく。図7に日常生活における人形を用いた象徴遊びの発達とそれに対応してみられた表出言語の発達を示した。

人形を用いたふり遊びにおいて、能動的他者としての人形の扱いが盛んにみられた1歳6ヵ月には、身近な人や動物の名称が獲得されており、他者の行為に対する言語による概括化の始まりがうかがわれた。そこには、事物や身近な出来事について、より深く知ろうとする心性 (mentality) が背景にあると考えられる。それは、本稿で〈現実とごっこ混同〉と呼んだ子どもの人形への行為からもみて取れる。身近な人間が行う行為や、子ども自身が日常的に行っている行為を人形に適用している。Wolf(1982)⁹⁾のこたばを借りれば、「人形というレプリカを自分たちと同等の他者として理解しようということ」の現れとそれはいえよう。現実とごっこを混同しているように思われる行為を行いながら、他者の行為の背景にある意図や人間としての共通の経験、行為を理解し、日常の出来事や物についての理解を子どもは深めていくのであろう。そしてそれと並行して物の名称に分化がみられていることから、現実とごっこ混同といった行為を通して1歳6ヵ月頃に人の行為や事物について動作的に認識していくことが物の名称の分化につながる認知的基盤を作るのではないかと考えられる。その後に、日常生活の遊びで物のみたて行為がみられ始めていることから、現実とごっこ混同を行いながら物の用途や性質が動作

日常生活における人形を用いた象徴遊びに みる発達	表出言語にみられる主な発達
生活年齢	
1 : 6 能動的他者の広がり	身近な人物の名称 キャラクターの名称
現実とごっこの混同	語の分化
1 : 7 みたての出現	指示語の出現
1 : 8 他者のふり	
1 : 9 現実経験の再現遊び	VS
1 : 10	自立語 2 語による 2 語発話
みたて・マイムによる表現 母親の養育行動のふり	日常経験が物の名称の獲得に反映される 自己の名称, 所有を示す格助詞
1 : 11 人形と人形との関係づけ みたて・マイムの広がり (経験の再現の精緻化)	日常経験が物の名称の広がりになす結びつく 会話の発達
2 : 0	
母親の養育行動のふりにみたてが組み込まれ母 親の役割を明確にとる みたてていることを言語で表明	副助詞「も」
人形の内的状態を言語で表明	自立語 3 語の結合
2 : 1	

図 7 日常生活における人形を用いた象徴遊びと言語発達との関連

的に認識され、ある物を別の物で表すといったみたてが発達すると思われる。

物のみたてが出現して間もなく他者のふりやマイムが出現した。みたてが出現する時期には他者の態度や行為の観察学習もいっそう進み、他者の行為が表象化され、遊びのなかで、他者の行為のふりとして現れてくる。そのように考えると、物のみたての発達と他者認識の発達は関連があると考えられる。それらの発達がみられる 1 歳 8 ヶ月頃には、物の名称の理解もさらに進んでおり、人間的な行為、出来事についての理解とともにことばの学習が進んでいる。真のシンボルの成立を能記と所記の分化という点から捉えれば、物のみたての発達は、真のシンボルの成立を示す指標となるかもしれない。McShane (1980)²¹⁾は、みたてにみられる象徴化能力の発達が VS を引き起こすと考えた。A 児の場合、みたてに必要な象徴化能力はすぐに言語発達に反映されているとはいえなかった。A 児では、みたてが出現した後、象徴遊びにおいて他者の行為のふりがみられ、その直後に、VS が起こり始めている。

したがって本研究の結果からは、物のみたて能力に必要な象徴化能力に加え、他者の行為がふり遊び化されるといった他者認識の発達とその表象化能力の発達が 1 語発話期における VS と関連があると考えられる。

以前に筆者¹⁵⁾が、知的障害がある子どもの療育場面における象徴遊びを観察した結果、McCune-Nicolich (1981)⁸⁾の象徴遊びの水準において、水準 3-B、他者の行為のふりをする事が、ほとんどの事例で(水準 4, 5 の遊びがみられている子どもにおいても)観察されなかった。そのことから、他者のふりを行うといった他者認識の発達に困難を抱えている子どもが知的障害をもつ子どものなかにいると考えられた。知的障害をもつ子どもでは、1 語発話期に VS がみられないという指摘があるが¹⁶⁾、もしもそうならば先の筆者の研究結果と本研究の結果とを合わせて考えると、VS と他者認識の発達は密接に関係しているといつてよいだろう。したがって、知的障害をもつ子どもの語彙発達を考えていく上でも他者認識の発達に目を向けていくことが大切であるといえる。

本研究の結果では、他者のふりがみられた後、VSが起こり、人形を用いた象徴遊びにおいて現実経験の再現遊びがみられ始めた。そのようなことから他者のふりが可能になるといった他者認識や、表象化能力の発達を基礎に、VSが起こり、一定のことばが獲得され、現実経験の再現遊びが可能になるといえる。現実経験の再現遊びの発達にはその出来事についての表象、すなわち出来事表象の発達が背景にある。星(1991)¹⁷⁾は、この出来事表象の発達の前提に、出来事の構成要素の表象化の発達を考え、他者の現実の行為のふりもそのなかに含めている。心のなかで対象や出来事を互いに関係づけ、再現遊びのなかで遊びを系列的に行うことが意識化され、ことばがその行為の流れのなかに位置づけられ、そのようになると経験とことばとがすぐに結びついていき新しい語の獲得が進む。そしてことばとことばを結びつけることも可能となる。Calvin(1997)¹⁸⁾は、人の知性はさまざまなレベルでシンタックスに関係していると述べ、心のなかで抽象的に考えたり、反省したり、遊んだりしたりすることとシンタックスの獲得が関連があるとしている。そのようなシンタックスの発達には身の周りの出来事に対する表象の発達が前提であり、それには一定のことばが獲得されていることが必要ではないかと考えられる。

つぎにその後のA児の日常生活における象徴遊びの発展をみると、基本的に信頼を置く他者との間での日常的経験の広がりが大きく関与しているように思われる。それとともに、特に現実経験を精緻化して表現することへの子どもの＜志向性＞が大きくかかわってくると考えられる。本研究のA児では、現実経験の再現遊びとその精緻化が志向され、それによって動作的には、みため、マイムが使われていった。そしてそれは1歳10ヵ月後半に母親の養育行動へのふりへと変化していった。その時期の言語発達においては、自己の名称がいえるようになったり、センテンスの基本的構造やそれを表す標識が獲得されていた。現実の経験を行為のレベルで概括化でき、他者の行為を自ら動作的に行うことによってその関係やその詳細が取り入れられていき、自-他の意識が明確になっていくのであろう。そして身近な大人との対話的な関係が持て、そのような関係性のなかで他者のことばを受け止め、子どもの思考をさらに働かせ、言語による概括が進む。その結果として、センテンスのなかで主語や意思の表現が明確になっていくと考えられる。

また人形と人形を関係づける象徴遊びがみられ始める直前には所有を表す助詞の獲得がみられている。人形と人形との関係づけは人に共通の経験の概括化と表

象化の発達を示すものであり、そのような認知発達と格助詞の獲得との関連性が考えられる。それらの発達を基礎に、他者のことばを受け止め、自らの思考を活性化させるような言語活動のなかで、メタ言語意識も発達するのではないと思われる。2歳過ぎにみられた日常生活での人形を用いた象徴遊びにみられる母親の養育行動のふりのなかでの言語表現やみだてていることの言語での表明はその現れであるといえよう。

以上述べてきたことは言語獲得期にある知的障害をもつ子どもの言語獲得を支える認知発達の援助を考えていく上で大切な問題であろう。彼らの指導において、語彙発達を考える際にはこれまで述べてきたA児にみられた現実経験の再現遊びの出現までの他者認識や表象化のプロセスを押さえ、日常生活における経験を広げながら、それらの経験の内面化（諸経験の統合）を考えていかねばならないといえる。

2. 言語獲得のスタイルとの関連

本研究を進めるなかで考えさせられた問題は言語獲得のスタイルの問題である。A児の場合、言語発達は漸進的に進んでいる。そして、表3からも明らかなように、行為のレベルで身近な事象や出来事について捉え、そのなかで他者の行為についてのふりやマイムがみられ、その後、言語による表現がみられてきている。まず日常生活経験からのトピックスが象徴遊びに析出され、そのトピックに関連した語彙の獲得がみられている。どちらかといえば、A児の場合は、動作先行型、理解先行型の子ともといえよう。

また、今回観察した時期の語彙発達をみれば、A児は物の名称の獲得が比率的に高く、語獲得のスタイルは、指示型の子ともと考えられた。Shore(1995)¹⁹⁾は、指示型の子ともは、表現型(expressive style)の子ともに比して、象徴遊びにおいて、みだてが出現する比率が高いと述べている。A児の場合も比較的早くからみだてが出ており、みだての出現時期の早さや遅さと語獲得のスタイルとの関連性が示唆される。みだてのような動作的記号活動が音声的記号活動に先行する子どもの場合、A児のように、みだてやマイムが比較的早くから出現し、出現後も多くみられるのかもしれない。また、Shore(1995)は、理解先行型で物の名称の獲得が進む子どもは、2語発話出現の段階において電文体発話となる傾向を指摘しているが、A児の場合も初期の2語発話は電文体であった。内容語が先に獲得され、人形を用いた象徴遊びからうかがわれる他者認識の発達にともない、機能語が獲得されていった。A児の初期の言語獲得のスタイルについては、動作先行型、理解先行型の子ともで、語彙獲得の傾向としては

指示型であり、語結合においては、電文体であるといえる。

村井(1978)²⁰⁾は、大人の動作やことばを子どもがなぜ機械的に模倣せずに、外界の刺激を取り入れ、再体制化して取り出してくるのか、このメカニズムを明らかにすることが、発達にとってきわめて重要なことであり、ことばの学習の秘密がそこに隠されていると述べている。小山も＜子どもの選択性＞ということばを用いて、村井と同様の点に注目してきた²¹⁾。日常的な出来事のなかで子どもは言語にふれていく。そして、表3からも明らかなように、人に共通する行為や経験についての理解と他者認識の発達とともにその表象化が可能となり、子どもの諸経験に多くのことばが位置づけられてくるといえる。VSはその結果として起こるのではないかと考える。

A児の場合、初期の語獲得のペースは緩慢であった。それは、スパートへの潜在期であったとも考えられる。その潜在期に経験が広がり、象徴遊びなどの動作的な記号活動によって表象的、シンボリックな世界が構築されていたことが、彼女のVSの基礎にあったと考える。A児のような動作先行型のスタイルがどのように形成されてくるかについては前言語期からの連続性の問題があると思われる。今後、前言語期の認知発達にみられるスタイルとVSの様相との関連性について検討していきたい。

文 献

- 1) Stern, D., Stern, W. : Die Kindersprache. Leipzig : Bath, 1907.
- 2) McShane, J. : Learning to Talk. Cambridge University Press, Cambridge, 1980.
- 3) Bates, E., Bretherton, I., Snyder, L. : From First Words to Grammar ; Individual differences and dissociable mechanisms. Cambridge University Press, Cambridge, 1988.
- 4) Goldfield, B., Reznick, J. : Early lexical acquisition : rate, content, and the vocabulary spurt. Journal of Child Language, 17, 171-183, 1990.
- 5) Bloom, L. : The Transition from Infancy to Language : Acquiring the power of expression. Cambridge University Press, Cambridge, 1993.
- 6) 清水美智子：概括機能とその発達。園原太郎編 認知の発達, 第4章, 226-235頁, 培風館, 東京, 1980.
- 7) 廣松 渉：表情, 弘文堂, 東京, 1989.
- 8) McCune-Nicolich, L. : Toward symbolic functioning : Structure of early games and potential parallels with language. Child Development, 52 : 785-797, 1981.
- 9) Wolf, D. : Understanding others : An longitudinal case study of the concept of independent agency. Action and Thought : From sensorimotor schemes to symbolic operations (edited by Folman, G. E.) , Academic Press, New York, 297-328, 1982.
- 10) 小椋たみ子：初期言語発達と事物操作の関係についての縦断的研究. 教育心理学研究, 36, 19-28, 1988.
- 11) 小山 正：精神発達に遅れを示す子供の言語獲得期の諸問題－象徴機能の発達を中心に－. 音声言語医学, 30, 151-166, 1989.
- 12) 小山 正：乳児のふり遊びの発達 (3)－初期の人形へのふり遊びにみられる子どもの心理－. 日本発達心理学会第5回大会発表論文集, 244, 1994.
- 13) Nelson, K. : Structure and Strategy in Learning to Talk. Monographs of the Society for Research in Child Development, 149, 1973.
- 14) Werner, H., Kaplan, B. : シンボルの形成－言葉と表現への有機発達論のアプローチ. (柿崎祐一監訳), ミネルヴァ書房, 京都, 1974.
- 15) 小山 正：精神発達遅滞児の早期言語指導における療育手段として象徴遊びの適用に関する一考察. 音声言語医学, 35 : 19-28, 1994.
- 16) 村井潤一：言語と言語障害を考える. ミネルヴァ書房, 京都, 1987.
- 17) 星三和子：象徴遊びにふくまれる表象の諸側面. 現代社会と子どもの発達研究会第2回大会発表資料, 1991.
- 18) Calvin, W. H. : How Brains Think. Harper Collins Publishers, 1996. 澤口俊之訳 知性はいつ生まれたか. 草思社, 東京, 1997.
- 19) Shore, C. : Individual Differences in Language Development. Sage, California, 1995.
- 20) 村井潤一：ことばへのアプローチ, ミネルヴァ書房, 京都, 1978.
- 21) 小山 正：知的障害をもつ子どものことば－言語と認知発達との関連を中心に－. 大石敬子編, 子どものコミュニケーション障害, 第1章, 大修館, 東京, 1998.

別刷請求先：〒501-1193 岐阜市柳市1-1

岐阜大学教育学部障害児教育実践センター

小山 正